

最近では、人前で手を合わすことが、「なぜか、照れ恥ずかしい」という考えの人が多いそうです。「手を合わす恥ずかしさよりも、手を合わすことのできない自分の恥ずかしさに、早く気が付いて欲しい」という金言が心に響きます。

題材法話

○仏教—その教えの根本は私たちは今、親鸞様のお陰によりお念仏のみ教えに出会わせて頂いています。が、お念仏のみ教えの根本は、お釈迦様によつて示された仏教そのものでありますから、お釈迦様がお説きになられた教えとはどのようなものかを知ることと大切なことでもあります。

○仏教は普遍の真理です「ピタゴラスの定理」というのを学校で学びました。「三角形の内角の和は常に180度である」などの数学の様々な定理を発見したのがピタゴラスという方で、それを「ピタゴラスの定理」と呼んでいます。実はこのピタゴラスは紀元前500年、今から2500年ほど前のギリシャの人で、数学者であるとともに偉大な哲学者でもありました。2500年前といえば、ちょうどお釈迦様と同じ時

代の人で、「ピタゴラスの定理」が現在でも大事なものととして使われており、2500年もの前にこのことを発見したというのはすごいことです。

ですがこの様々な定理を2500年前にピタゴラスが発見しなければ、その定理は存在しないのかといえ

ば決してそうではなく、180度」という真理は厳然として存在するのです。このことは非常に大事なことで、お釈迦様は三角形の真理どころか、三千大千世界の真理といわれる広大無辺のあらゆる時間と空間の中であらゆるすべての「いのち」のあり方を発見されたのです。が、それはけつしてお釈迦様が創造されたものではない、く、永遠に変わることはない真理を発見されたという

ことなのです。よく一般的に、仏教はお釈迦様が説かれた宗教という

ことと、お釈迦様が悟られた真理

お釈迦様が発見（悟り）された不変の真理は、三つの真理という意味で「三法印」といいます。

第一は「諸行無常」、第二は「諸法無我」、第三は「涅槃寂静」です。まず第一の「諸行無常」は、自然界も人間界も、肉体も精神も、すべてのものが時々刻々と移り変わっている存在である」ということです。そして第二の「諸法無我」は、「全てのものは単独で存在することはなく、全て存在するものに関わり合いの中で存在する」ということである

（無常）、私一人で存在すること（無我）ができません。私達はこのことを素直に受け入れることができません。わいて欲しいですし、良い

ことはそのまま留まって欲しいと願います。また、ついつい自分中心に他人や物事を見てしまいがちで、自分の思い通りになつて欲しいと願います。

けれども、諸行は無常であり、諸法は無我なのです。そこには悩みや苦しみ、果ては争いが生じるのです。これをお釈迦様は『煩惱』と呼ばれました。

この煩惱を断つところに、初めて安住の境地があるのだと説かれるのです。これが第三の真理「涅槃寂静」であります。仏教は、この涅槃寂静の世界を求める教えであります。

5月例会住職法話より（次号に続）
《解説》
三法印で使われている言葉はおよそ察しがつくと思いますが、「涅槃」という言葉が分かりにくいと思いますので解説します。涅槃：インドの古い言葉、サンスクリット言語 *nirvana* の音写で、煩惱の火が吹き消された状態の安らぎ、さとり、境地を意味します。また生命の火が吹き消されたということ、入滅、死去を意味することもあります。